

充実した研究支援体制

ライティング指導室（創思館 307）には、研究指導助手（統括スタッフ）と英語論文指導スタッフが常駐しており、以下の業務を行っています。

- ・日本語論文の書き方および添削指導（研究指導助手）
- ・英語論文の書き方および添削指導（英語論文指導スタッフ）
- ・先端総合学術研究科主催のシンポジウム・研究会の企画・運営に関わる業務。
- ・『Core Ethics』（研究科紀要）の編集、研究科彙報の編集、研究科 Web サイトの管理、院生プロジェクトの運営の支援など。

また本研究科の博士論文の閲覧受付、図書・備品の貸し出し、『Core Ethics』、彙報の配布等も同室にて実施しています。

多彩な研究教育プログラム

先端総合学術研究科は、開設以来「プロジェクト型大学院」として他の研究所・センター群と連携しつつプロジェクトを遂行してきました。現在は、①のプロジェクトの拠点を中心に、②の機関と連携して教育研究を進めています。

①プロジェクトの拠点

- ・生存学研究センター
- ・ゲーム研究センター
- ・国際正義共生研究会

②連関する研究所群

- ・人間科学研究所
- ・国際言語文化研究所
- ・アート・リサーチセンター
- ・グローバル・イノベーション研究機構

など

これまでの博士論文例

2011年9月と2012年3月の博士号取得論文(18本)

「日本における受精卵診断導入をめぐる論争—産婦人科医団体と障害者団体・女性団体の議論を中心に—」

「近代日本における公衆浴場の衛生史的研究」

「日韓少女マンガの比較—純情漫画の成立と展開を中心に—」

「ビデオゲームに関する心理学的研究—ゲームプレイヤーの心理状態とボタン操作行動を中心に—」

「日本における作業療法の現代史—対象者の「存在を肯定する」作業療法学の構築に向けて—」

「韓国における障害運動の現代史—当事者主義の形成過程—」

「重度障害者の安定した地域生活構築のために—A L S の人の独居生活支援活動を通して—」

「ビデオゲーム産業のイノベーション—アクター・ネットワーク理論の視座から—」

「複合性局所疼痛症候群患者の支援に関する一考察—「認められない」病いの現状と課題—」

「高橋亀吉の経済思想研究—第一次世界大戦後から世界恐慌まで—」

「社会福祉サービスとしての家庭奉仕員（ホームヘルパー）制度の変遷」

「貧困の機作追究の試み」

「地域の移民の社会的排除—抑圧委譲の再生産—」

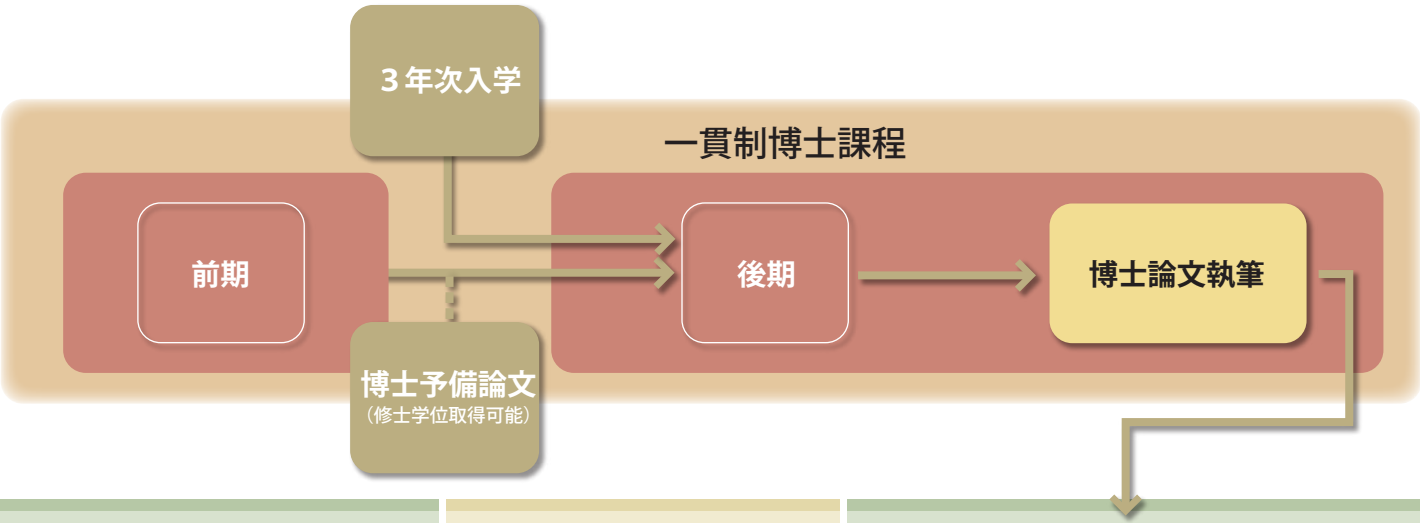
「重度身体障害者の居住／住居—家族に頼れない2人のALSの人の支援を通して—」

「朝鮮植民者二世小林勝の脱植民地文学」

「人工腎臓をめぐる分配と選択—日本における選択と費用負担と配分—」

「近代台湾における台湾鉄道をめぐる歴史」

「パレスチナ／イスラエル地域における歴史認識の交錯—新しい歴史記述を中心に—」



院生のための奨学金・研究活動助成制度

- ・先端総合学術研究科出版助成制度（2014 年度まで）
- ・先端総合学術研究科院生プロジェクト
- ・立命館大学大学院特別奨励奨学金（S・A・B）
- ・立命館大学大学院特別育英奨学金（S・A・B）
- ・立命館大学大学院学生会発表補助金
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程研究奨励奨学金（S・A・B）
- ・クレオテック大学院私費留学生奨学金
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程国際的研究活動促進研究費
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程学生会発表補助金
- ・立命館大学大学院学生会研究会活動支援制度

※先端総合学術研究科の院生が利用できる支援制度の一部です。制度は変更される場合があります。詳細は、入学手続き時または入学時に説明します。

※立命館大学大学院生に対する奨学金・支援制度の概要
http://www.ritsumeiji.jp/grinfo/grinfo04_j.html

研究者としてのキャリアパス支援

- ・博士学位取得後のキャリアパスとして、各種ポストドクトラルフェローの制度があります。日本学術振興会特別研究員や、立命館大学衣笠総合研究機構の専門研究員プログラムなどに多くの院生・修士が採用されています。

日本学術振興会特別研究員採用者数
2008 年度 DC5 名+PD1 名
2009 年度 DC5 名+PD2 名
2010 年度 DC9 名+PD1 名
2011 年度 DC4 名+PD3 名
2012 年度 DC9 名+PD4 名
2013 年度 DC2 名+PD3 名

衣笠総合研究機構専門研究員新規採択者数

2010 年度 4 名
2011 年度 3 名
2012 年度 3 名
2013 年度 4 名

- ・本研究科独自のキャリアパスとして、研究指導や関連業務を行う研究指導助手制度があります。

博士論文などをもとにした書籍の刊行

書籍名（2011 年 12 月以降刊行）

新山智基『世界を動かしたアフリカの HIV 陽性者運動』（2011）

韓星民『情報福祉論の新展開』（2012）

村上潔『主婦と労働のもつれ』（2012）

牧昌子『老年者控除廃止と医療保険制度改革』（2012）

利光恵子『受精卵診断と出生前診断』（2012）

先端総合学術研究科の多様な入試方式を紹介します

個性ある研究戦略をもった新しいタイプの研究者を養成するために、先端総合学術研究科は、さまざまな入試方式を設定しています。以下に入試要項の抜粋を掲載しますので、自身の研究スケジュールをにらみながら、果敢にアタックしてください。

入学定員は全体で 30 名です。各入試方式はその募集人数を越える合格者数になることがあります。なお、受験資格や実施時期を詳細に定めた入試要項については、必ず最新のものを大学院課に請求して下さい。大学院入試 http://www.ritsumeiji.jp/gr/index_j.html から申し込みできます。

一般入学試験（募集人数 10 名）

■選考方法

①筆記試験
論文 公共・生命・共生・表象の 4 つの領域から 1 つを選択
外国語 英語（但し英語以外の外国語での受験を希望する場合には出願開始日までに独立研究科事務室に相談のこと）

※辞書持込可（辞書機能付電子手帳等の電子機器類は不可）

②書類選考
③面接

■出願書類

①各入試方式共通
入学志願票（本学所定用紙）
研究計画書（本学所定用紙 2,000 字程度）
年次計画書（本学所定用紙）

②最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書

③卒業（演習）論文の概要：必須ではありませんが、卒業論文を提出、または提出予定の場合は参考資料として提出してください。

自己推薦入学試験（募集人数 5 名）

■選考方法

①書類選考
②面接

■出願書類

①各入試方式共通（一般入学試験を参照）

②最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書

③自己推薦書（本学所定用紙）及び関連資料

④自由テーマ論文（2,000 字程度）

社会人自己推薦入学試験（募集人数 5 名）

■選考方法

①書類選考
②面接

■出願書類

①各入試方式共通（一般入学試験を参照）

②最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書

③自己推薦書（本学所定用紙）及び関連資料

④自由テーマ論文（2,000 字程度）

⑤履歴書

飛び級入学試験（募集人数 若干名）

■特記すべき受験資格：本学の 3 回生在学生で、次のすべての要件を満たす者。

①3 回生終了時に卒業必要単位を 110 単位以上修得していること。（出願時には見込みで可）

②外国語の卒業必要単位を満たしていること。（出願時には見込みで可）

③3 回生までの学部の卒業要件科目の GPA が 3.60 以上*の者。（出願時には見込みで可）* GPA (GRADE POINT AVERAGE の略)の算出方法については入試要項別冊を参照のこと。

■選考方法

①筆記試験
論文 公共・生命・共生・表象の 4 つの領域から 1 つを選択

〈問い合わせ先〉 立命館大学独立研究科事務室 tel 075-465-8348
〈入試要項請求先〉 立命館大学大学院課 tel 075-465-8195

外国語 英語（但し英語以外の外国語での受験を希望する場合には出願開始日までに独立研究科事務室に相談のこと）

辞書持込可（辞書機能付電子手帳等の電子機器類は不可）

②面接

■出願書類

①各入試方式共通（一般入学試験を参照）

②成績証明書

外国人留学生入学試験（募集人数 若干名）

■特記すべき受験資格：次の①②のいずれかの要件を満たし、かつ、講義を理解できる程度の日本語能力を満たす者。

①外国において日本の学校教育における 16 年の課程に相当する課程を修了した者、または今年度 3 月までに修了見込みの者。

②留学生の在留資格で日本の大学を卒業した者、または卒業見込みの者。

■選考方法

①書類選考
②面接

■出願書類

①各入試方式共通（一般入学試験を参照）

②入学資格に関する学校の卒業（見込）証明書

③最終学校の成績証明書

④卒業（演習）論文の概要：必須ではありませんが、卒業論文を提出、または提出予定の場合は参考資料として提出してください。

⑤立命館大学大学院入学願書（本学所定用紙）

⑥旅券の氏名・生年月日が記載されたページのコピー（出願時旅券を所持しているもののみ）

学内進入学試験（募集人数 10 名）

■特記すべき受験資格：立命館大学各学部 4 回生以上（*）に在籍し今年度末に卒業見込の者もしくは今年度 9 月卒業の者で、成績基準のすべてを満たす者。

（*）5 回生以上の者については標準修業年限での卒業とならなかった理由（アメリカン大学との共同学位プログラムへの参加や留学等）について 400 字程度の理由書（様式自由）を提出してください。

①前年度終了時まで取得した単位が 110 単位以上の者。

②GPA が 3.40 以上の者。GPA（GRADE POINT AVERAGE の略）の算出方法については入試要項別冊を参照のこと。

■選考方法

①書類選考
②面接

■出願書類

①各入試方式共通（一般入学試験を参照）

②成績証明書および卒業見込証明書

③卒業（演習）論文計画書：必須ではありませんが、卒業演習に相当する科目の履修者は参考資料として提出してください。

3 年次転入学試験（募集人数 若干名）

■特記すべき受験資格：国内および外国において、修士の学位もしくは専門職学位を有する者または本研究科に入学までに授与される見込みの者。

■選考方法

①論文 修士論文またはそれに相当するもの、および研究計画書をもってこれにあてます。

②面接 論文と入学後の研究計画について試問します。

■出願書類

①入学志願票（本学所定用紙）

②研究計画書（本学所定用紙 2,000 字程度）

③最終学校の成績証明書および修了証明書または修了見込証明書

④修士論文（またはそれに相当する研究実績）およびその概要（2,000 字程度）

修士論文等の他に別の論文を提出し、審査の対象とすることができます。9 月実施入学試験において、修士論文を執筆中の場合にはその概要（2,000 字程度）を提出してください。

いずれの試験も、試験場は衣笠キャンパスです。

立命館大学大学院 先端総合学術研究科

<http://www.r-gscefs.jp/>



人類の課題に新たな〈知〉をもつて挑む



Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences

「核心としての倫理」(Core Ethics)を軸に、公共、生命、共生、表象の四つのテーマのもと、新しい研究領域を創出します。

先端総合学術研究科の理念

——ディシプリンからテーマへの転換

日本の大学制度は今、近代化の初期に大学が創設されて以来、もっとも大きな変革の時代に直面している。学部から大学院までの教育研究システム全体が、国際的な水準を視野に入れた根底的な見直しをせまられている。高度な専門職技能の養成と、新たな時代の問題に取り組む研究者の養成がもとめられているのである。この新たな時代の研究者の養成に向けて立命館大学が提起するのが先端総合学術研究科の構想である。

基本的に学部の上に置かれた現在の大学院は、明治以来の近代的学問体系にのっとったディシプリン、すなわち専門分野の区分に基づいて構成されている。先端総合学術研究科は、20 世紀から今世紀に引き継がれた新たな質の、先端的なテーマに取り組む研究者の養成のために、特定学部を基礎とするのではない独立研究科とした。独立研究科としてディシプリンの総合化をはかり、また、研究所・センター群との連携によるプロジェクト研究における教育によって、大学院教育と先端的で総合的な研究との緊密な結合を実現することを基本的な狙いとしている。（2003 年先端総合学術研究科開設文書より）

一貫制のプロジェクト型大学院 ——ディシプリンからテーマへの転換

1st stage

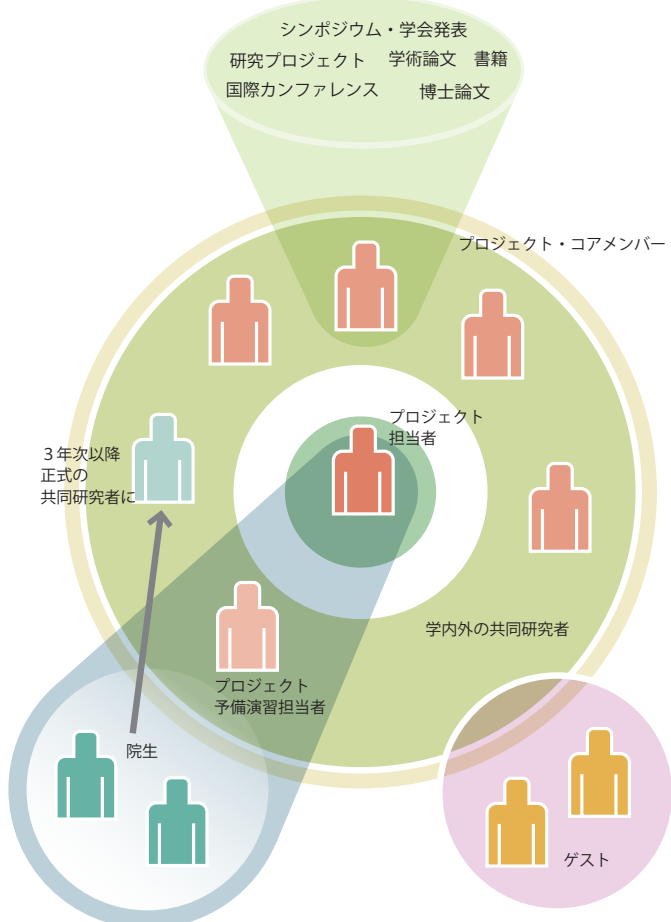
多様なプロジェクトが織りなす新しい大学院教育
それ自体が一個の壮大なプロジェクトです。

立命館大学の研究所・センター群は、これまでもプロジェクト研究によって多くの成果を上げてきました。こうしたプロジェクト研究を大学院教育に結びつけることは、それ自体がひとつのプロジェクトといっても過言ではありません。

プロジェクト型の教育・研究システムは、テーマごとの合同研究会や個別のプロジェクト、院生それぞれの課題に応じたフィールド調査、メディア制作などを通じて、新たな研究の潮流を生み出すことを目標とします。また研究会は専任スタッフを中心に学内外の第一線の研究者たち、さらにそのときどきのゲスト参加者を交えて開催され、研究ネットワークを形成します。

院生は、1、2年次には研究の基礎的な力を身につける勉強をしながら、こうした研究会や個別プロジェクトに準メンバーとして参加します。1、2年次に開設されるプロジェクト予備演習は、研究会やプロジェクトの各テーマに密接に関連して、テーマごとの基礎的な研究手法を身につける科目です。2年次後期にはプロジェクト担当者自身が担当するプロジェクト予備演習で、博士予備論文の仕上げに専念します。博士予備論文は、プロジェクト研究に正式に共同研究者として参加するための資格審査の材料となります。

博士予備論文の審査に合格すると、その学生はもはや準メンバーではなく正式な共同研究者として、プロジェクト研究そのものの運営にあたって中核的な役割を果たすことになります。すなわち、計画的に研究を推進する日々の活動の一翼を担いつつ、研究会や学外の諸学会等における成果発表を着実に積み重ねていくことになるのです。



2nd stage

4つのテーマ領域と13人の専任スタッフがディシプリンを超えて新しい研究領域を創出します

個人個人の日常的な生き方から、国家や共同体レベルの政策決定まで、さまざまな次元を視野に入れながら、わたしたちは、コア・エシックス（核心としての倫理）にふれる4つのテーマを選びました。そして、テーマごとに「科目としてのプロジェクト」が設置され、さらに各教員が中心になって運営する「個別プロジェクト」が設けられるのです。



天田城介
社会学



井上彰
政治学、政治哲学



上野千鶴子
社会学



立岩真也
社会学

公共

21 世紀における公共性

国民国家の法的擬制である公／私の境界の変容過程をたどり、分配的正義および経済システムの問題を視野に入れながら、国民国家に変わるシステムの可能性を探ります。

社会／社会的なものの原理的解明——天田城介

社会学を基礎として天田が中心となって、〈社会〉あるいは〈社会的なもの〉の原理的・理論的な解明を試みる。19 世紀における〈社会〉ないしは〈社会的なもの〉が迫り出していく歴史的・時代的ダイナミズムとその政治経済的な存立条件を探索することを通じて、戦前・戦後の日本社会における〈社会〉ないしは〈社会的なもの〉を解説していく。特に、近代日本社会における社会政策とりわけ高齢者関連政策に照準した上で、現代における福祉国家の批判的検討とその理論的考究を行うものとする。換言すれば、「なにゆえに、いかにして、脆弱な人びとを我々は生かそうとするのか／生かそうとしないのか」という最も大きな問いに対して何らかの回答を与えることこそが、ここでの最大の目的となる。

正義と民主シーの政治哲学——井上彰

政治哲学を基礎として、井上を中心に、社会の規範形成に深く関わる正義と民主シーについて原理的解明を試みる。多様な生を許容する社会において、正義を基底とする価値体系とはどういうものか、そしてその追究の意義について様々な角度から議論する。そのうえで、自由と平等という2つの規範理念から構成される民主シーについて、その概念、構想をめぐる分析的考察から、具体的な制度や運動に関する実証ないし言説分析に至るまで幅広く検討する。以上を通じて、公共性をめぐる政治哲学の可能性について探究する。

超高齢社会における福祉とジェンダー——上野千鶴子

少子高齢化は歴史上かつてない段階に入り、日本は人口減少社会に突入した。そこでますます必要となるケアのコストを、いかなる負担と給付の配分のもとに社会が担うかは喫緊の課題である。しかもケアはこれま

で女性の不払い労働としていちじるしくジェンダー化されてきた。その現実を踏まえながら、ケアのニーズと提供をその両面から、現場と実態に即して検討していきたい。日本の経験は世界が目とするモデルとなるはずである。

身体の現代・他——立岩真也

私は私の仕事を続けていけばいくことになりますが、以下はその一部でもあり、ただ自身でとてもできず、多くの人がいるとよいと思うこと。通っていない研究費応募書類の冒頭。「障害や病が訪れて人は身体の差異・変容を生きる。その人達を巡ってこの国でこの50 年余りにあったことの大部分は、記録も考察もされていない。今後しばらくが最後の機会となる。気鋭の研究者の力と大学院生・修了者の参与を得て、研究を組織化し、以下を明らかにする。」続きはH P 検索→「生存学」→「身体の現代——言説・運動・政策」。



小泉義之
哲学・倫理学



松原洋子
科学史・科学技術論

生命

争点としての生命

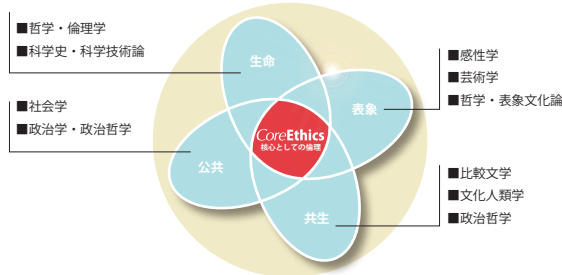
近年のゲノム分析の進展、生命操作をめぐる新しい事態、自然破壊の急速な進行…、などが投げかける倫理的諸問題を整理して、新しい生命・環境の理解と表現の可能性をひらきます。

生命論の理論的争点——小泉義之

哲学・倫理学を基礎に、小泉が中心となって、近現代において生命と生物が理論的にどのように認識され、文化的にどのように表象されてきたのかを整理して、新しい生命論を展望する。また、現代生物学がいかなる理論的課題に直面し、現代文化がいかに生と死を表象しているかを整理し、生命と生殖と病と死について総合的に探究する。そして、現代的な生物観ひいては人間観を構築することを目標とする。

生命と技術の倫理——松原洋子

科学史・科学技術論を基礎に、松原が中心となって、生命科学・医療・福祉に関する科学的知識および科学技術をめぐる諸問題について広範な資料収集をおこない、適切な研究法を探索する。個人レベルでの生命の保持や能力の増進、次世代に関わる生殖や出生の管理、個人間での生体組織・機能や情報の交換、個と全体の関係が問われる人口・生態系・進化など、様々な位相に注目しながら、科学と技術の抱える問題を、整理・検討する。そして、こうした問題に接近するための生命論と、あるべき新しい倫理の構築をこころみる。



小川さやか
文化人類学



P・デュムシエル
政治哲学



西成彦
比較文学



渡辺公三
文化人類学

共生

共生の可能性と限界

多大な犠牲をとまう不完全な共生実験であった人間の歴史を批判的に遡りつつ、未来に向けて、そうした犠牲を伴わない生命と生活の可能性を構築する方途を探ります。

狡知、アナザーワールド、そして Living for Today の人類学的探究——小川さやか
文化人類学を基礎に小川が中心となって、世界各地の同時代を生きる人々の日常的でミクロな営みから、他者と共によく生きるためのしくみや知恵、新しい人間観・世界観を模索する。とりわけ、Living for Today の営みや、窮地を切り抜ける実践・行為（はったり、ごまかし、愛想笑い、逆切れなど）と、そこで働く狡知を民族誌的な事例から検討する。新自由主義的な経済システムや未来優位の時間の観念、生産主義的で自律的な主体観に縛られたわたしたちの生のあり方を相対化し、一つではない多様な生のあり方を構想する。

市民社会は共生のモデルとなりうるか？——P・デュムシエル

政治哲学を基礎にデュムシエルが中心となって、市民社会の起源と構造を論じたさまざまな社会、政治哲学の再検討をおこなう。西洋のそれぞれの国民的伝統のなかで市民社会が形成され、また、この社会の原理を根拠づけるさまざまな哲学の流れが生み出されてきた。市民社会においては、欲望を実現する主体としての市民を前提として、市民が契約し、経済システムを構成し、社会を民主的に運営するとされるが、欲望はどのように構成されるのか、欲望と経済システムの関係はいかなるものか、そうした基本的な視点から、そこに含まれた「普遍的」とされる原理の可能性と限界を問い直す。

カタストロフィと文学——西成彦

人類の歴史ははずかすの「災厄」に彩られてきた。自然災害であれ、戦争や人災であれ、災害はけっして一様にひとに襲いかかってくるわけではない。しかも、加害者側に立った責任を引き受けなければならぬということが往々にしてある。そうしたなかで、「カタストロフ」の危険にさらされてきたひとびと、および、そこに加害者・傍観者として関わっ

CoreEthics

てしまったひとびとの経験と記憶は、その一部が「記録」に残されるが、それでも足りない部分は「文学的な想像力」にゆだねるしかない。文学の可能性と限界を考える。

人類学から共生の可能性と限界を考える——渡辺公三

文化人類学を中心に共生の可能性と限界を考究する。共生は人（個体、集団）のあいだの関係、人その他の生物種、人と環境の関係などさまざまな位相で考えられる。一つの空間を複数の個体が同時に占めることはできないという真理と、同じ場をめぐって人や生物や物が、共存から排除、他の存在の抹消までを経験する多彩なスペクトルの変化の歴史とのあいだに、法学、政治学、生物学、環境学など多様な学知の成果が錯綜するのが共生というテーマ領域である。マルセル・モースの再評価、共生の文明論などが主題となる。



竹中悠美
芸術学



千葉雅也
哲学・表象文化論



吉田寛
感性学

表象

文化と芸術の表象論的分析

文化と芸術の諸事象を表象論的観点から読解・分析します。技術、歴史、思想、実践への理解を主軸とし、創造と受容の場、諸々の文脈、メディアといった問題系へとアプローチします。

社会におけるアートの作用機序——竹中悠美

芸術学を基礎に置き、社会の中でアートに託された機能とそれを実践するための制度的・技術的システムを検討する。アートがパブリックな文化財として「消費」される現代の資本主義社会において、われわれとアートを取りもつ主たるシステムは美術館やアートセンターという場所と情報メディアである。そこで、展覧会、アートプロジェクト、文化政策が企図する文化活動の方法と課題、およびメディアにおけるその扱いを検証することによって、アートの意義を問い直す。

現代哲学と批評のあいだで思考する——千葉雅也

表象文化の多様なケースを併せて考察するために、現代哲学を媒介として芸術・文化・社会・欲望の諸理論を交流させ、そして、領域「横断的」な論述の方法、および「批評」的なスタイルの修辞学を検討する。人間—私たちを特権化しない「ものごと」の存在論・形而上学と連動して展開される表象論を目指し、これを、現代のテクノロジー状況——それは「人間性」をめぐる常識・良識を変容させざるをえないだろう——に応じた「人文学への批評」の一環として提示していく。

感性学的デザイン論——吉田寛

感性学（エスティックス）の観点からデザインやもの作りのための理論を構想・構築する。感性学は、本来的には「受け手」の側の様態を分析するための理論だが、多くの製品やサービスがユーザビリティやインタラクティビティを重視するようになった今日、感性への着目はデザインにおいて欠くことのできない重要な視点となりつつある。インスタリアルデザインからウェブデザイン、ゲームデザインまで様々な分野に光をあて、デザイン実践と密接に関連付けられた体系的理論としての感性学を打ち立てる。